

グルジア・パンキスイ渓谷問題の種族・信仰的背景

北川誠一

はじめに

一九九二年にソ連から独立したグルジア共和国の政治課題は、一言で述べると、ソ連時代のグルジア国家の領土の一体性を確保すること、及びその領域においてロシアの影響を排除し、完全な国家主権を行使することであろう。領土の一体性とはロシア連邦への帰属変更を求めて内戦が勃発し、休戦後も問題未解決のまま膠着状態にあって、事実上グルジアの権力が及ばないソヴィエト時代の自治共和国アブハジアとソヴィエト時代の自治州南オセチアをどのような手段によってであれ、あるいはどのような法的形態であっても、グルジアの国境内に留めるということである。両国間の交渉の中ではアブハジアの基幹民族であるアブハジア人に対しては、最大の条件としてグルジアと同等の立場の連邦制さえ提示されている。グルジア政府が、基幹民族ではなく過去の移民の子孫であると認定している南オセチアのオセチア人や、アルメニア人が多く住み、頓に自立化を強めているジャヴァヘティ (Javakheti) 地方に対しても新しい国家的統合の形態が示されねばならない。またグルジア人イスラーム教徒掌握の手段として成立したアジャリア自治共和国は、住民の多数がグルジア人であるのでアブハジアや南オセチアとは異なり民族的基盤をもたず、ガムサフルディア (Zviad Gamsakhurdia) 初代大統領のようにアジャリアの自治権に否定的な意見を述べるにもかかわらず、独立移行期に混乱が少なかったこともあって、ソ連時代に形成された在地の権力構造と良好な対露関係を背景に、自立化傾向を強めていた。二〇〇四年のアバシツェ (Aslan Abashidze) アジャリア大統領失脚事件は、同自治共和国をグルジアへ引き戻す運動の現れであると評価することも可能であろう。

主権の維持とは第一の問題を切り札として使いつつ、ソ連時代の国境内で一定のヘゲモニーを行使しようとしているロシアのグルジアの内政外政に対する圧迫を排除することである。グルジア領内のロシア軍基地問題もこれに拘わる懸案事項であろう。かつて、南オセチアやアブハジアで分離運動が盛んになった一九八九年、グルジアではモスクワは、南オセチアの、あるいはアブハジアのカードを出したという比喻が語られた。ソ連政府はグルジアのソ連からの独立運動をグルジア内部の分離運動を煽動することで阻止しようとしているという意味である。ソ連崩壊後もロシア政府は、隣国アゼルバイジャンと協調しつつ、原油輸送や防衛の面で、ソ連から離れ EU や NATO に近づこうとするグルジアをロシア中心の政治、軍事、経済ブロックの中に留めるために、アブハジア、南オセチア問題解決に対しても積極的な参加を試みてきた。ロシアは、アブハジアと南オセチアの併合は主張しないものの、平和維持軍中におけるロシア人部隊の存在感は大きいので、グルジアにとっては、次第にロシアとの社会経済的一体感を強める両地域を放置したままで、CIS 圏から離脱することは不可能であるから、領土の保全と主権の維持は、一つの現象の二つの側面であるとも言うことができる。

一方グルジアも第一次チェチェン戦争終了後は、直接の隣国であるチェチェン共和国と活発に外交を展開した。その表れは、グルジアの首都トビリシにチェチェン政府代表部が設けられたことであろう。また、チェチェン原油のグルジア経由の輸出についても検討されたとも言われる。第二次チェチェン戦争期の二〇〇一年から二〇〇三年にかけては、チェチェン側ゲリラのグルジア領内、特にグルジア北東部パンキスイ (Pankisi) 渓谷逃げ込みを巡って、グルジア、ロシア両国の間で厳しい批判の応酬が続いた。ロシア側がチェチェン・ゲリラのグルジア側への逃げ込みと越境侵入、グルジアの特定の地域がゲリラの出撃、後方基地かしていることを指摘し、国境の警備とゲリラの引渡しを要求。ロシア軍の越境攻撃もあり

えることを示唆した。当時のシェワルッナツェ (E.Shewardnadze) グルジア大統領は自国領内におけるチェチェン・ゲリラや外国人傭兵の存在を否定し、ロシア軍のグルジア国境の侵犯、国境を越えた攻撃には強く抗議した。グルジア側国境警備隊には配置された兵員数からしても国境の完全なコントロールは不可能であったが、ロシア軍のグルジア越境攻撃やロシア・グルジア共同作戦は拒否し、グルジア国内に残存するロシア軍基地撤廃を言及しつつ、電力、ガス、グルジア市民のロシア入国ビザ等の問題を抱える対ロシア交渉の切り札としてチェチェン・ゲリラ問題が用いられていた。しかし、ゲリラの不在を主張するシェワルッナツェ前大統領の戦術は、九・一一同時多発テロ事件およびテロリズムに対する作戦以降、正反対に変わった。国内にテロリストの存在を認めて、掃討のためにアメリカと共同軍事行動をとることは、ロシアの影響力の排除を目標とするグルジアの国益に合致することになるからである。ロシアとアメリカ合衆国の間に座を占めたシェワルッナツェの細かい駆け引きの要は、グルジアとチェチェンの国境そのものを除いては、主としてグルジア内部のチェチェン人居住地であるパンキシイ渓谷の管理を巡るものであった。従ってシェワルッナツェの二元外交は、グルジア国内にチェチェン人が集住する地域が存在しているという地政学的環境に負っているということが出来る。この時期のグルジア、ロシア間の外交問題全般については、広瀬陽子「ロシアの対コーカサス外交—テロと紛争の狭間で揺らぐ国際関係」(松井弘明編『9.11 事件以後のロシア外交の新展開』財団法人日本国際問題研究所、二〇〇三年)等の論考があるが、パンキシイ渓谷の存在そのもの、及びそれが外交上の問題になり得る個々の要件については、詳細な議論は少なかった。ここでは視点を特定の問題、渓谷の地理的・民族的・宗教的位置に限って、この問題を考察するが、先ず事件の経緯を示そう。

一. パンキシイ渓谷チェチェン人ゲリラ逃げ込み問題

パンキシイ渓谷問題がグルジア、ロシア間の政治的懸案として認識されたのは、一九九九年三月のステパシン (С.Степашин)、シェワルッナツェ会談においてであるが、このとき協議されたのは地元マフィアの問題であった。グルジア、ロシア国境は麻薬取引の温床となり、パンキシイ渓谷のドゥイスイ (Duisi) 村では公然と薬物が取引されていた。更に犯罪者のグループは家畜を盗むだけでなく、住民や旅行者、グルジアの地方官憲を誘拐した。当時チェチェンには七人のグルジア人質がいると報道されていた(1)。二〇〇一年六月には、キスト(Kist)人مامカ・アラブリ (Mamuka Arabuli) が地元の役人を誘拐したのに対抗して、現地のグルジア (プシャヴ) 人自警団長 Luka Ramazashvili がバスを止めチェチェン人およびキスト人五名を人質にした事件(2)は、グルジア政府が治安確保の能力と予算を欠いていることを如実に示すものであった。このようにパンキシイの治安の悪化は、アルカイードが原因ではなかった。グルジアの国会議員でコーカサス民族関係委員会委員長مامカ・アレンツェ (Mamuka Areshdze) <一九五七年生れ>は「私は、パンキシイの状況を一九九六年から述べてきたが、私の情報は内務省レヴェルで止められた。パンキシイには人工的に犯罪地区が作られて、それには誰も彼もがかかわっていた。二つのチェチェン戦争の間の平和な期間にはここでは大金をつくられた。グロズヌイの工場でヘロインを製造し、パンキシイでは麻薬を隠しておいて、あちこちに送った。ここへはチェチェンからだけでなく、アフガニスタンや旧ソ連のアジアの共和国からヘロインが送られてきた。グルジアは弱体化して、安定化の途中だった。少しばかりの金で平から署長まで警察全体を買収することができた。一九九六年にチェチェンから最初の人たちが来たが、彼らは避難民ではなかった。彼らはチェチェンにでかけていて、帰省した地元のキスト人だった。ドゥダエフが登場したときパンキシイ出身の大勢の人々が、新生チェチェン共和国の建設にかかわりたいと思った。ある人達はただ単に母語でグロズヌイ大学で勉強するために出かけたのだ(3)。グルジア政府もこの状況を全く放置したのではなかった。一九九七年グルジア内務省は渓谷の中心のドゥイスイに警察署を設置しようとしたが、住民の反対にあい、当時のアスラン・マスハドフ、チェチェン共和国大統領の顧問クタエフ (A.Kutaev) の仲介があって、ドゥイスウの手前数キロメートルの地点に検問所を設けるに留まった(4)。

また、一九九九年にはイスラーム原理主義の影響が浸透し、アフメタ郡全体で五〇人のワッハーブ派がおり、パンクスイのキスト人とダゲスタンのアッキ (Akki) 人の間に勢力を拡大している。また、特に「ドゥダーエフ軍団」を率いるサルマン・ラドゥエフ (Salman Raduyev) は、グルジアとダゲスタンのチェチェン人、すなわちキスト人とアッキ人を統合するためにアレクシー・カフタラシュヴィリ (Aleksij Kavtarashvili) なる人物を派遣したという (5)。第二次チェチェン戦争開戦直後に始まった避難民の流入はパンクスイ情勢を複雑にする要因となった。九月一五日から一〇月一〇日までに、二千人がコーカサス山脈中部のシャティリ (Shatili)、カズベギ (Kazbegi) から越境してグルジア領に入ったが、内五百人がアゼルバイジャンとトルコに向かったという。また、同年一二月、UNHCR は一、二〇〇人の難民をヘリコプターでシャタリからパンクスイに輸送した (6)。一〇月、グルジア政府はグルジア国内に滞在するチェチェン人の動静掌握に努め、一千五百人の避難民がアフメタ郡に存在することを確認した。彼らのほとんど全員が女性と子供であったが、内半数はロシア領に職を求めていたグルジア国籍者の家族であったという。一九九九年一二月にはチェチェン人のテロリストがグルジア国内でロシア外交官と家族を襲撃するのではないかと噂が流れたが、そのような事件は起こらなかった。この時点では両国政府間には何の対立もなかったと思われるが、問題は単に両政府とも国境を管理する能力がなかったことである。

二〇〇〇年になると四月には東部グルジアのロシア国境は、武器密輸とチェチェン側傭兵・志願兵の越境ルートになっているという報道がなされた。同年五月には、日本人ジャーナリスト常岡浩介氏が、パンクスイがチェチェン人コマンドの待機基地になっていることを報道した (7)。また、武装したチェチェン人がパンクスイ渓谷を掌握し、アラブ (ヨルダン人、サウジアラビア人、またはイスラームに改宗したイエメン出身のユダヤ人とも言われる) 人ハッターブ (Hattab) のコマンド訓練学校が置かれていると報道された。一〇月には、ロシア領で追撃を受けたチェチェン側野戦軍司令官ルスラン・ゲライェフ (Ruslan Geraev) が最大一五〇人の部下と共にグルジア側に越境したが、グルジア軍当局に武器引渡しを拒否し、負傷者を残して撤退する事件が起こった。グルジア政府当局の否定にもかかわらずトルコの『ミラト (Millat)』紙は、アフメタ郡のツィヌバニ (Tsinubani) 村には、シャミール (Shamil) とスルホ (Surkho) に率いられたキスト人、アラブ人、クルド人からなる三〇〇人の部隊が存在すると報道した。これ以降ロシアはグルジア政府にグルジア領内のチェチェン人ゲリラの掃討、引渡しを要求するようになった。グルジア側は対面上ロシア政府の要求には応じかねたが、それ以上に治安確保が困難な状況にあった。

トピリスィのアメリカ情報筋は、パンクスイに一〇-八〇人のサウジアラビア人、ヨルダン人、アルジェリア人のテロリストが来たのは、九・一一事件以降であると述べる (8) が、グルジア国家安全省は、二〇〇二年二月まで渓谷にアルカイードの資金による病院と射撃訓練場があったことを発表 (9)。二〇〇二年フランスで逮捕されたテロリスト容疑者三人が、パンクスイでチェチェン人ゲリラおよびアルカイードの化学兵器専門家と接触したと自供、ロンドンでも同様の報道があり、シェワルツェ大統領もアラブ人化学者二名がかって渓谷に滞在したことを認めた (10)。

二〇〇一年秋にはパンクスイ渓谷とロシア国境の間のトゥシェティ (Tushetli) およびヘヴスレティ (Khevsureti) でチェチェン人ゲリラの活動が目撃された。また、アブハジアのコードリ Kodori 川流域では、ゲライェフ配下の小部隊とグルジア人民兵のゲリラ活動が、ロシアのメディアで報道された (11)。グルジア政府はロシア政府の要求をかわすためにも、チェチェン人武装勢力を掃討する必要に迫られるようになった。ロシア軍を導入させることはシェワルツェにとって政治的自滅であるからである。このためシェワルツェはアメリカに頼らざるを得なかったが、一方それは対露関係の険悪化を意味した。このような中、九・一一事件はグルジアには有利に働いた。二〇〇二年二月にアメリカ軍事顧問団がトピリスィに到着した時、ロシア政府は露骨に不快の念を表明したが、三月、プーチン大統領は軍部を説得し、ウズベキスタンで可能な米軍進駐はグルジアでも可能であると宣言した。アメリカ政府はグルジアに年間軍事予算の四倍近い六千四百万ドルの援助を供与、グルジア軍は

三月二三日、特殊部隊を動員して、演習「コジョリ (Kodzhori) -二〇〇二」を実施した(12)。二〇〇二年五月にはグルジア領内のチェチェン人戦闘員最大数八百人と報道されたが、一方グルジア政府はグルジア領内において法的に問題あるチェチェン人は六〇人までであるとリリースした。

二〇〇二年八月、グルジア国内で多数の人物を誘拐した有名なキスト人捜いショタ・チアシュヴィリ (Shota Chichiasvili) がモスクワで逮捕されたが、グルジア政府がチアシュヴィリの身柄引き渡しを要求する一方、ロシア政府は前述のチェチェン人兵士引渡しを求める状況に陥った。これは後に双方が身柄を引き渡し、紛争の原因にはならなかった。

ロシア政府は、イヴァン・イヴァノフ外相が、八月八日のカザフスタン、アゼルバイジャンと共同のカスピ海での軍事演習に先立って、パンキシイ問題はロシアの武力無しには解決しないと述べて(13)、グルジアを牽制した。八月二五日ついにグルジア当局はパンキシイ渓谷のキスト人集落に特殊部隊を投入を決定、九月二日には捜索を実施したが、武装集団は既に退去していて、わずか数名の武器不法所持者を逮捕したのみであった(14)。グルジアのシェワルナツェ大統領は在トビリシのチェチェン・イチュケリア共和国代表で、キスト人のヒズリ・アルダモフ (Khizrii Aldamov) にチェチェン人のグルジアからの退去を要求したが、拒否された(15)。ロシア議会ではグルジア領への越境攻撃の必要が議論され(16)、グルジア議会でももしロシア軍越境があればグルジア国内のロシア平和維持軍の退去とグルジアの CIS からの脱退することが決議された(17)。このような状況下グルジア内務省と国家安全省特殊部隊が渓谷の左岸で捜索を続け、街道から外れたハラツァニ (Khalatsani) 村を捜索、交戦の結果、アフマドフ (Ahmadov) 兄弟のグループに属する民兵が逮捕され、大量の武器弾薬が押収された(18)。また、秋までには六〇人のゲリラが逮捕され、内外国人一四名がアメリカに引き渡されガンタナモラに送られた(19)。

一方、九月にはロシア国境の監視に当たっていた OSCE の英トルコ・グルジア監視団のパトロール隊が一時捕虜に(20)なる事件が起こり、二〇〇三年六月にはアブハジアのコドリ川でもゲラエフの部下を含むチェチェン人によってロシア平和維持軍兵士が一時的に身柄を拘束(21)された。二〇〇三年一月にはパンキシイ北西に隣接するヘヴスレティアへの米軍特殊部隊投入計画が報道され、二月には春にゲラエフが五〇人の部下とともにグルジア領に越境する計画有りとして掃討作戦が展開された。この時カラチャイ人原理主義者四人が殺害されるとともに、捕虜になったアラブ人一人が米軍に引き渡された。二〇〇三年初めの頃パンキシイのチェチェン人難民は八千人と言われたが、既に六千二百人はグルジア国外に移住、その内大部分はチェチェンに帰国した。その他に八千人がパンキシイを含むグルジアに残っていた(22)。

グルジア軍および治安当局が身柄を拘束したチェチェン人ゲリラ容疑者のロシア引渡し要求に伴って、両国政府の関係は険悪化したが、六月には、ロシア側は千人までの規模のチェチェン人が、ロシア潜入をねらっており、ロシア軍がついに自らパンキシイを爆撃したという事実関係不明の報道があり、グルジアの有力政治家イリナ・サリシュヴィリ=チャントウリア (Irina Sarishvili=Chanturia) 女史は、ロシアはパンキシイにチェチェン・ゲリラがいると称してグルジアに侵入を計画しているとの声明を出した(23)。

パンキシイ渓谷のゲリラ基地化は二〇〇二年のグルジア人治安部隊の捜索によって、またグルジア領へのゲリラ逃亡問題は二〇〇四年のゲラシモフの戦死(24)によって一応の解決をみた。また、二〇〇三年一月の政変と翌年二月のサアカシヴィリ M. Saakashvili の大統領当選は、ロシアに対して、チェチェン・カードを用いるシェワルナツェ型外交の終焉を意味した。

二. パンキシイ渓谷の歴史地理的情

パンキシイ渓谷はグルジア東部カヘティ(Kakheti)地方アフメタ (Ahmeta) 郡の一地域である。カヘティは、グルジア東部がアゼルバイジャン、タゲスタン、チェチェンに接する地域で、住民はカヘティ人 (グルジア語カヘティア方言の話者) およびグルジア系山地向

ウシ人が主であるが、ヴァイナフ系キスト人、バツ（バツオイ）人、オセツト人、アルメニア人、アゼルバイジャン人、アヴァール人などが居住する。アフメタ郡は同地北部に存し（面積二、二四八平方k m）、主要都市アフメタ（都市部と一五集落を含む）は、人口八千七百人（一九七四）で、大コーカサス山脈といくつかの支脈を北に臨む、標高は五六七mの丘陵にあり、テラヴィ（Telavi）から二九k m、トビリスィから一八四k mの距離である道路は東西の幹線アフメタ・プシャヴェリ（Pshaveli）・ナパレウリ（Napareuli）、テラヴィ線と北に向かうそのトゥシェティ枝線、およびアフメタ・ジョクロ枝線が主要なものである。同郡は一都市（アフメタ）と、（ソ連時代は）九村落ソヴィエト（sasoplo sabch'o）合計七五の集落によって構成されている。（25）

パンクスイ溪谷は大ボルボロ（Borbolo）山からアラザニ川平野までの三四k m、幅は七k m程の溪谷である。北に大コーカサス山脈、西にパンクスイ山脈に臨むのに対して、南はアラザニ川沿いの交通に恵まれていて、カヘティ地方の中心と深く結びついている。郡の最北部には、ロシア国境に接して歴史的・民俗学的地域であるトゥシェティがある。アフメタ郡のほかの地域は南に向かって流れるアラザニ（Alazani）川の流域であるのに対し、この地域は東に向かって流れるダゲスタンのアンディスキー・コイスー（Andiskiy Koysu）川の支流であるピリキティ・アラザニ Pirikit-Alazani 川とトゥシェティ・アラザニ（Tushetis Alazani）川及び付属の小河川の流域で、即ち大コーカサス山脈の北斜面にある。（26）トゥシェティは三〇〇〇－四〇〇〇m級の山々に囲まれ、伝統的にはピリキティ（Pilikiti）、ゴメツァリ（Gometsari）、ツォヴァ（Tsova）別称ツォヴァタ（Tsovata）、チャグマ（Chagma）の四共同体からなる住民は主として夏の牧畜に従事するが、冬季はアフメタ地域とは交通途絶になるので一部の人々を除き、同郡南の低地に移動する。トゥシ人の内、ツォヴァ・トゥシ人のみが、ヴァイナヒ系のバツビ Batsbi 語を母語とする。しかし、彼らは古くからのキリスト教徒で、母語には拘わらず自他ともにグルジア人と見られている。（27）

アフメタ郡は、ロシアのチェチェン共和国とはイトム・カラ（Itum-Kale）からチャトウイ・アルグン（Chanty Argun）川に沿って源流近くのアツンタ（Atsunta）峠からグルジア領シャティリに至る自動車による経路、テベロスムタ山の東の峠の他に一九世紀まで用いられていた幾つかの通路があり、ダゲスタン共和国との間にはアンディスキー・コイスー川沿いの経路、またこの川の別の支流やアヴァールスキー・コイスー川支流の源流からコドル（Kodor）峠があった。パンクスイ溪谷はグルジア内部にあって直接ロシアと国境を接していないものの、同郡北部のトゥシェティ地方および、同郡に接するヘヴスレティ地方を経由して、伝統的な交通体系の範囲内では、地元民だけが知る間道を含め、四通八達の地であるということができる（28）。一九七〇年に実行されたグルジア・ヴァイナ人類学共同調査ではトゥシェティからチェチェンへ運ばれる夥しい数の羊と牛が観察されている。

一方、チェチェンのイトムカラからは、トウモロコシ、大麦、家庭用品が運ばれていた。また、トゥシェティの家畜をテレクの平原に降ろし、塩、毛糸のロープ、馬の蹄鉄、釘、木の食器、荷鞍を仕入れる人々も見られたという（29）。

三. パンクスイ溪谷の集落とキスト人住民

今日、パンクスイ溪谷にはチェチェン系の人々が住み、キスト（ロシア語ではキスティン Кистин）人と呼ばれている。キスト人はドゥイスィ（Duisi）即ち旧のパンクスイ・ツイヘ（Pankisi Tsikhe）、オマロ（Omalo）、ジャコロ（Jaqolo）、ゼモハラツァニ（Zemo Khalatsani）、ビルキアニ（Birkiani）などに数千人（30）が居住する。この人々に固有の言語キスト語は、言語学者によって北コーカサス語族のナフ＝ダゲスタン語群のナヒ（或いはヴェイナヒ）語に分類され、彼ら自身ヴァイナヒ人（チェチェン人とイングーシ人及び類縁の集団）であるとみなしている。キスト語は言語上の特質上、イングーシ語ではなく、チェチェン語に分類するのが適当であるとされているが、これらの言語は非常に近い関係

にあり、自由に理解ができると言われている。キスト語は家庭で用いられているだけで、教育、マスメディア、行政上の用語ではない。公的な場ではグルジア語が用いられるので、キスト人はキスト語とグルジア語のバリンガル使用者である。

バツビ人のグルジア移住が中世に溯るに対して、キスト人の大規模移住は一九世紀半ばになされたことが知られている。一八世紀のグルジア人歴史家、地理学者ヴァフシュティ (Vakhushuti Bagrationi) <一六九六-一七七〇>は、一八世紀のトゥシェティの住民について述べ「キスティとグリグヴィ (Gligvi) の方角に住むものは、主に彼らの言葉を話す。バルサマ (ン) Palsama の谷に住むものは、言葉も宗教も混ざっている」と記し、ピリキティ・アラザニ川の溪谷の住民の混住状態について述べている。トゥシェティの北部ではチェチェン語イングーシ語が主として通用し、南部ではチェチェン語イングーシ語とグルジア語が混用されていたのである。この記述自体はピリキティ・アラザニのトゥシュ人がヴァイナヒ化しているのか、そこにヴァイナヒが住んでいるのかは判断できないが、一八世紀グルジア国境に接してチェチェンとイングーシの南部にキスト人がいることが明らかである。ヴァフシュティの集落名称表では、トシュティのパンクスイですら一九集落中の二集落がキスト人に因む名称を冠している。従ってもっと北のトゥシェティでは、キスト人が居住していた可能性があるであろう。キスト人のグルジア特にパンクスイ移住は、十九世紀には一層加速される。後にシャミールが率いることになるイマーマツ運動直前の一八三一年、キスト人三一〇家族がグルジア側に移住したが、そのうち一五五戸 (七七五人) はグルジア人であると主張したとの記録が残る。約半数がキスト人であったことがわかるが、今日サギルタ (Sagirta) 村に三戸、インドゥルタ (Indurta) 村に四戸などこのときの移住に関わる三二戸が現存し、ピリキティ各集落には、チェチェン系のクカラアニ (Kukalaani)、ダディアニ (Dadiani)、ベヒアアニ (Bekhiaani)、ボルジキア (Bordzhikiani)、ケレヒアニ (Kelekhiani) などの姓が残っている (31)。

パンクスイにおけるキスト人の記録に残る最初の大規模な移住集団は、ドゥイ (Duiy) に率いられた人々であったと言われる。ドゥイはシャミールのナイーブ (代官) であったが、争いを起こしツモソ (Dzumoso) ・タイプに属する部下を率いてロシア領グルジアに移住、ドゥイスィ村を開いたと言われる。また、マイスティ (Maisti) ・タイプに属するジョコラ (Dzhokola) も一八五〇年頃、シャミールの圧迫と経済的困難に耐えかねてパンクスイの西の山地ティアネティ (Tianeti) に移住し、さらにそこからパンクスイに移住し、ジョコロ村を開いたとされる。これらの移住の事実は村人に伝えられた伝承や地方官の文章によって明らかであるがドゥイスィ村のガルガシヴィリ (Gargashvili) 家は、イングーシのガラシュキ (Galashuki) 村出身であり、彼の地のガウルギエフ (Gaurgiev) 家とは同族であることを互いに認識していると述べている。また、同じくドゥイスィ村ハヌカシュヴィリ (Khanukashvili) 家はチェチェンのイトゥムカラ近くのゲズィホイ (Gezikhoy) 村から、先祖がテブロスムタ (Tebulos-Mta) 峠を通過してこの村に移住した経緯を語り継いでいる。このようにパンクスイのキスト人もチェチェンとイングーシの同族と同じく、自分たちのタイプについて知っている。ここではチェチェン人のヒルハロイ (Khil'kharoy)、ハチャロイ (Khacharoy)、マイスティ (Maisti)、ゲザホイ (Gezakhoy)、チナホイ (Chinakhoy) であり、イングーシ系のタイプは、ヴァッピ (Vyappi)、ジェラホイ (Dzherakhoy)、ガラシュキ (Galashuki)、エレティ (Ereti) 等であると言う。

山地民の間には、他のタイプに属する人々を編入するための制度があり、参加希望者は牛を屠ふり、ホスト側の人々と饗宴することによって行われた。山地チェチェンとグルジア人のトゥシ人は、新来者は一定の身分的差別をうけるが、キスト人の同姓団体ゴール (gor) では、一切の差別はなく平等である。このように伝統的には新来のチェチェン人難民がキスト人の社会に統合されていくシステムが存在するのであるが (32)、それが今日実行されているかについての情報はあまりない。

チェチェン人難民が故郷に近いトゥシェティではなく、パンクスイに移動した理由は、ロシア軍の越境爆撃を恐れたこと、トゥシュティでは冬雪が多く生活が困難であることと

ともにキスト人との言語的社会的近縁性があげられる。

四. パンクスイ溪谷のイスラーム教

キスト人の祖先がパンクスイに移住した一九世紀半ば、北コーカサスではチェチェン人とイングーシ人の間にイスラーム教が広まりつつあったが、パンクスイ移住者のなかにもイスラーム教徒が見られた。六〇-七〇年代には、無名のカラジャラ (Karadzhalá) 出身のムッラーがドゥイスィで、子供達にアラビア語を教え始めた (33)。カラジャラはアフメタとテラヴィの間の村落である。この時親達はアラビア語の教育に反対したという (34)。一方、グルジアでは、「カフカス正教復興協会 (Общество воставления православия в Кавказе)」が創立され、キスト人にたいしても盛んに布教活動を行なわれた。その結果、一八六六年頃、パンクスイではキリスト教徒は七七一人で、普通にグルジア語を話し、子供たちはグルジア語の学校に通っていたが、二〇〇人はムスリムで、ムッラーと礼拝所をもっていた。さらに、一九世紀の末、キリスト教徒の中心ジョコロでは、キリスト教徒一八七人、ムスリム一八人であり、逆にドゥイスィでは、キリスト教徒四七人、ムスリム四九九人であった (35)。この地域のイスラーム化の最初の頁を飾るのは、ハンゴシュヴィリ (Khangoshvili) 家の三兄弟、ゲビシャ (Gebisha)、アヒガ (Akhiga)、ノンギ (Nongi) であった。長男ゲビシャはメッカに巡礼してから布教活動を初めたが、兄弟の努力によりチェチェンから学識ある敬神家ヴァアタ (Vaata) が招聘され、ヴァアタの死後は新たにムッラー・クルマフ (Kurmakh) が招かれた。クルマフが一〇年程の滞の後帰郷すると、今度はレズギ人のムッラー・クルバン (Kurban) が招かれ、地元のキスト人女性と結婚して、ドゥイスィ村に留まった。パンクスイで最初にモスクの建設が計画されたのは、一八九八年ドゥイスィにおいてであったが、地方官憲の妨害にあったものの、ベラカン (Belakan) のムッラー、アブドゥラー・バカンオグル (Abdulla Bakan Oghul) が、トピリスィ (当時はティフリス) にあった南コーカサスのイスラーム宗務局長であるシャイフ・アル・イスラム (Shaikh al-Islam) に請願して許可を得、一九〇二年 (あるいは一九〇五年)、(ドゥイスィの西の、今日もプシャヴ人が住む (36)クヴァレルツカリ (Kvarel Tskali) 村のプシャヴ人キスティシュヴィリ (I.Kistishvili) の力により建立された。ベラカンは現在アゼルバイジャン領であるが、アヴァル人がまとまって居住する地域である。一九世紀までは、ジャロベラカニ (Jaro-Belaqani) 自由共同体、ロシア統治期以降はザカタラ (Zakatala) 地方として知られる。パンクスイが北コーカサスだけでなく、全体としてはシーア派が多いアゼルバイジャン北部のスニー派地域とも繋がりがあったことが明らかである。一九〇五年から三年間は、チェチェン人のムッラー・タヴソルタ (Tavsolta) が三年間勤務した。更に、一九〇九年にはアゼルバイジャンからナクシュバンディー (Naqshbandi) 派神秘主義教団のシャイフ・イス・エフェンディ (Is Efendi) 別名イサ・シャイフ (Isa Shaikh) がドゥイスィで教団を開いた。イサは一九二〇年に死亡したが、信者は金曜日毎に、男は夜、女は昼に別れて、彼の旧宅で修行を続けた。イサの墓は、グルジア共和国ラゴデフ (Lagodekh) 郡のカバラ (Kabala) 村にあって巡礼の対象になっている。しかし、ソヴィエト政権成立後、モスクは閉鎖された (37)。ナクシュバンディー教団は、一八世紀のシャイフ・マンスールの乱、一九世紀のイマーマット運動の原動力となった。しかし、イマーム・シャミールの降伏の後には、有力なシャイフはトルコに亡命したと言われる。瞑想を持って修行の方法とするナクシュバンディー派は、ダゲスタンでは古くからのイスラームの影響下にあった平地に多く、ソ連時代にはソヴィエト当局に忠実であったと言われる。

コーカサスではナクシュバンディー派と並んで、カーデリー (Qadiri) 派が有力であったが、前者の修行が瞑想を持ってする静かなものであるのに対し、後者は大声で神の名を唱えたり、走り回ったりする騒々しいものである。この後、モスクを再開するためにドゥイスィ出身で、カーデリー教団のシャイフで、クンタ・ハッジ (Kunta Khaji) に繋がる修行者マチグ・マ

チャリカシュヴィリ (Machag Machalikashvili) が、イングーシェティアから帰郷、教団の基礎を置いた。クンタ・ハッジは、一九世紀後半、戦争に厭いたチェチェン人とイングーシ人の間に信者を広め、勢力拡大に疑いの目を向けたロシア当局によって逮捕され、流刑処分を受け、流刑地で客死した(一八六七年)。彼の死後はその四人の弟子が、独立した教団を創設し、師父の教えを広めた。さらに一九二八年にはチェチェン人シャイフ・アドウ Shaikh Adu が、新たにカーディリヤ教団の支部を開設した。彼は行のために太鼓を用い、男子はあごひげを伸ばし、白い帽子を被るようになった。アドウの帰郷後はムッラー・ケリム・ドゥイシュヴィリ (Kerim Duishvili) が教団を引き継ぎ、日曜日シャイフの旧宅で行をおこなった。アドウの墓はチェチェン共和国ヴェデノ郡のヴィシュニ・ヴェデノ (Вышнее Ведено) 村にある。ついに一九六九年にモスクが再建されたが、そこでもズィクルが行われ、アラビア語とキスト語で賛歌 (nazm) が歌われた。六〇年代以降、ドゥイスイ以外のオマロ、ビルキアニ、ジョコロにも神秘主義教団の支部が置かれ、に老人だけでなく、若者も参加するようになった (38)。一方パンクスイでは一九世紀のロシア政府による積極的正教化の影響も残り、現在でもオマロ、ジョコロにはキリスト教徒が見られる。

ソ連崩壊後パンクスイの社会は大きく変わった。特に、一九九九年の第二次チェチェン戦争以後の変化は著しい。一九九六年から二〇〇一年までの間に、溪谷には四つの新しいモスクが建設された。その最大なものは、ドゥイスイのウスプ・マルゴシュヴィリ名称中学校の近くに建てられた煉瓦建のものである (39) このモスクの写真はウェブ上で公開されている (40)。現在ではどの集落にもアラビア語学校があり、さらに上級の教育施設も設けられた。校長およびNGO団体の努力で、五〇人の生徒が外国の学校へ留学していると言われる。父兄の中にはアラビア語教育に反対し、政府の管掌を求める声も上がっている (41)。さて、九・一一事件以後アルカイダとの関係を疑われて資金の移動を凍結されたサウジアラビアの機関に国際慈善基金 IBF (Benevolence International Foundatuon)、アラビア語名アルビルアルダウラ (Al-Bir al-Dawala)、ロシア語名メジュドナロドヌイ・ブラゴトヴォリテリヌイ・フوند (Международный Влаготворительный Фонд) があるが、同基金はドゥイスイにも支所をもっている (42)。モスク、学校の建設、学生留学等の費用は、直接・間接にここから支出されたものであろう。特に、一九九九-二〇〇〇年にアラブ人布教団が目立ったことは、トビリスのヨーロッパ諸国大使館筋の情報にある (43) としても、アメリカ当局観測の、九・一一事件以降溪谷に一〇-八〇人のサウジアラビア、ヨルダン、アルジェリア人テロリストが潜入したとする(44)のは、テロリストと布教者を区別しているかは不明である。これらアラブ系布教団体は、教義のワッハーブ主義であれば土着イスラーム教を多神教すなわち非イスラーム教であると厳しく攻撃し、あるいはロシアで多用される広義のそれであっても、真のイスラーム教を標榜して、非イスラーム的習慣を非難する。ダゲスタンにおいては、葬礼を巡って、ワッハーブ派と神秘主義教団員が激しく衝突しているが、パンクスイではそのような事例は報告されていないようである。ドゥイスイ村にシャリーア法廷が設置された件 (45) は、治安の悪化に対する自己防衛とすることも出来る。様々な影響下で、パンクスイにおける所謂「ワッハーブ派」信者は、政府に派遣されパンクスイの行政責任者ツァヰキツェ (Timur Tsadzikidze) によると五〇〇人に達したという (46)。即ち、人口の五一〇%である。ダゲスタンでは葬儀を巡って、伝統的イスラーム教徒と「ワッハーブ派」との対立が始まり、多くの社会的側面に拡大さ、さらに独立の宗教共同体(ジャマーアット)が宣言され、武力紛争に至った経緯がある。パンクスイにおける状況も安心できるものではないであろう。

グルジア政府の治安能力の低下と、人口に匹敵するチェチェン人の流入は、旧からの非キスト人住民に深刻な状況に陥れ、一九九八年から二〇〇二年春までには、ドゥマストゥリ (Dumasturi)、クヴェモ・ハラツァニ (Kvemo Khalatsani)、ツイヌバニのオセット人は、不動産を放棄して、北オセティアに移住し、コレティ Koreti 村の住民も移住の準備中であるという (47)。また、ゼモ・ハラツァニのプシャヴ人は不動産をキスト人に売却して、移住した。(48)かくして、溪谷のアラザニ川左岸ではキスト人の村だけが残った(49)。溪谷は

アラザニ川に沿って南北に細長く伸びていることは、既に述べたが、川の右岸にはバアツアニコ (Baatsa Niko) = トウシェティ街道が川筋と平行に通り、クルタナツェウリ (Kurtanadzeuli) 川からタロシオス・ツカリ (Taloshos Tskali) 川までの間にドウイスイ、ジェカロ、ビルキアニ、ツイバヘヴィ (Dzibakhebi) の中心を通る。これらはキスト人の村である。街道の左手の丘陵にはプシャヴ人の住む五集落が点在する。街道の左手がアラザニ川であるが、川の左岸にドウモストゥリ以下のオセット人の集落がまとまっていたのである。ただし、古い資料 (50) にゼモ・ハラツアニは、以前のプシャヴ人の村で現在キスト人が住む村とあるので、この村のキスト人化とチェチェン人難民流入とは直接関係がないものと考えられる。

結語

本稿は、二次的文献を用い、何故パンキシイ渓谷にチェチェン人難民が収容され、また、チェチェン独立派ゲリラや国際支援組織の根拠地になったかを、地理的位置、民族的帰属、宗教の観点から考察したものである。グルジア・ロシア国境から数十キロ入ったパンキシイ渓谷は、一九世紀半ばから今日のキスト人の祖先であるイングーシ人・チェチェン人が居住して独自の言語と習俗、親族構造を残し、また現在に至るまでコーカサスの同族と帰属共有の記憶を持っている。両者の間に住むキリスト教徒のトゥシ人は、国境の高地と東グルジア内部の平地にわたるトランスヒューマンスを行なうだけでなく、ソ連時代も北コーカサスと経済交流のシステムを持っていた。宗教的に見るならば、キスト人の多くは、伝統的イスラームの信者であって、ナクシュバンディー派、カーディリー派の神秘主義の信者も見られるが、この地域でもソ連崩壊以降、所謂イスラーム・ブームが生じ、アラブ系の教師と資金によって、原理主義的イスラームの布教がなされていた。戦争難民に留まらず、独立派ゲリラやアラブ系志願兵にとっても、ここに住むことは容易であったと思われる所以である。

九・一一以降、アメリカ合衆国は南コーカサスにも実兵力や行動のための資金を供与し、ロシアもアメリカの作戦に反感を持ちつつ、ある種共同の反テロリズム作戦を実施、国境封鎖を厳しくした。この成果は、二〇〇二年夏のグルジア警察の渓谷内村落での捜査と、二〇〇四年早春二月のルスラン・ゲラエフ戦死によってロシアとアメリカの双方にとって一定の成果を見た。しかし、グルジア外相イラクリ・メナガリシュヴィリ (Irakli Menagarishvili) <当時>が述べるように、「チェチェン問題が解決しない限り、パンキシイ渓谷の問題再燃の危険性は、まさに、国境での状況と同じく、残っている」 (51) のである。

注

- (1) НГ, 19, 28 марта, 1999
- (2) Правда, 19 Июня, 2001
- (3) Дарья・Асламоваの Dalia Aslamova とのインタビュー。КП, 25 сентября, 2002
- (4) Skakov, p. 152
- (5) НГ, 1999, 3.19., 28
- (6) <http://www.unic.or.jp/recent/pastnews/121799.htm>
- (7) 『Sapio』二〇〇〇年十一月八日、members.jcom.home.net.jp/lerrmondram/pankisi による。
- (8) The Guardian, March 26.2002
- (9) НГ, 16 января, 2003
- (10) MN, January 22-28, 2003 ; listen-voa.com/007/638/c638html
- (11) КП, 18 октября, 2001
- (12) НГ, 26 марта, 2002
- (13) КП, 2 августа, 2002
- (14) КП, 30 августа, 2002
- (15) MN, August 28-September 3, 2002

- (16) *НГ*,13 сентября,2002
- (17) *MN*,ibid.
- (18) *НГ*,19сентября,2002
- (19) *Time*,Oct.19,2002
- (20) *НГ*,26сентября,2002
- (21) *НГ*,11 Июня,2003
- (22) ジャラブ・ハンゴシュヴィリ (Jarap Khangoshvili) の言。アスラモヴァ記者とのインタビュー (*КП*,25сентября ,2002)
- (23) *НГ*,16 июня,2003
- (24) *КП*,2 марта,2004г.; *НГ*, 2 марта,2004
- (25) *Kartuli Sabochta Entsiklopedia*,T I I, p.106
- (26) *ibid.*,p.663
- (27)グルジア百科事典では、バツビ語の話者を三千人とするが、オスマノフとアリロエフ (Османов и Алироев, с. 83) は、五千人程度と見ている。双方とも一九七〇年代の推計二、四〇〇人 (Skakov,p..151) に基づくものであろう。チェチェン人はノフチ、イングーシ人はガルガイなどと自称し、合わせてヴァイナヒと称する。ただし、チェエチェン人、イングーシ人、バツビ人の総称をナヒと称するという説 (Османов и Алироев, с.84) には異論も見られるであろう。彼らはグルジア人もからもチェチェン人・イングーシ人からもグルジア人であると見られてきたからである。
- (28) Маргошвили, с .35-44
- (29) Шавхелишцвли, с .62
- (30)あるい5千から一万人であると言われているキスト人の人口は、最大では一万人とする主張がある (Османов и Алироев, с. 83) 。一方、クルツキヅェとチコヴァニの五千のとする推計 (Kurtskidze and Chikovani,p. 3) 、ロシアのジャーナリストがよく使六千とする数、スカコフの五-六千 (Skakov,p.151) 、アフメタ郡警察署長ズラブ・トゥシェリ Zurab Tusheri 氏のリリースする七千とする数 (The Terrorism Research Center,2004,Jualy 1 ハイパー版) 、またすでに一九九九年に七千人であったとする (Blandy,C.W.Pankisiikoje Gorge:Resedents,Refugs&Figures,Conflict s/Studies Research Center,March,2002) 、8千人とする説 (Georgia's Chechen Monority Allegedy Spreads"Corruption"http://www.iga.lv/mineralres/archive.10322199-21.html。このソースはマムカ・アレシヅェ氏であると思われる) 。八千人または一万人より多くない人数 (V.Dubnov.To the Health of a Potential Enemy,New Times,Jan.2004<newtimes.ru/detail.asp?_id=640) はこれらの数字を勘案してのものであろう。一九四〇年代初期の人口二、七四〇人 (Skakov,p.151) に、人口増加率を乗じて計算することもできる。
- (31) Шавхелишцвли-1983, с .136-168
- (32) Маргошвили-1990, с .65
- (33) Маргошвили-1990, с ,232
- (34) Kurtsidze and Chikovani,p.31
- (35) *ibid.*, с .212-215,230-231
- (36) Маргошвили-1990, с . с .15
- (37) Маргошвили-1990, с .139
- (38) Маргошвили-1990, с .231-239
- (39) Kurtskidze and Chikovani,2002,p.34
- (40) [http:// www. zahara.dk/Duisi%20Mosque. htm](http://www.zahara.dk/Duisi%20Mosque.htm)など。
- (41) *ibid.*p.34
- (42) <http://www.mof.go.jp/jouhou/kokkin/ko1411a.htm>
- (43) Traynor,Ian, Georgia;US Opens New Front in War on Terror,The Guardian,Marchi,2002,20 <www.guardian.co.uk/print/0%2c38%2c4377612_10368%2c200.html>
- (44) *ibid.*

- (45) Kurtskidze and Chikovani,2002,p.40
 (46) Sharon La Framiere,2002,April 28
 (47) Ibid.p.36
 (48) 一九九二年から一九九四年にかけて、スヴァン人ジャヴァ・イオセリアニ Java Ioseliani の「騎士団 (Mkhedorioni)」と、キスト人の中で衝突が起こったことがある (Skakov,p.152)。
 (49) ibid.p.40。ただし、クルツィツェとチコヴァニ (Kurtkidze and Chikovani,p.41) はこれを近年の出来事のように記すが、スカコフ (Skakov,p.152) は、一九九二年の (ウラジカフカース近郊プレゴロドノイ地区を巡るオセット・) イングーシ紛争の結果、渓谷でも緊張が高まったとする。グルジア内のチェチェン人も一九四四年に追放処分を受けた。その詳細については研究がないようである。
 (50) Маргошвили,1990, с.15
 (51) НГ, 21 февраля,2003

<参考文献目録>

КР : Комсомольская Правда

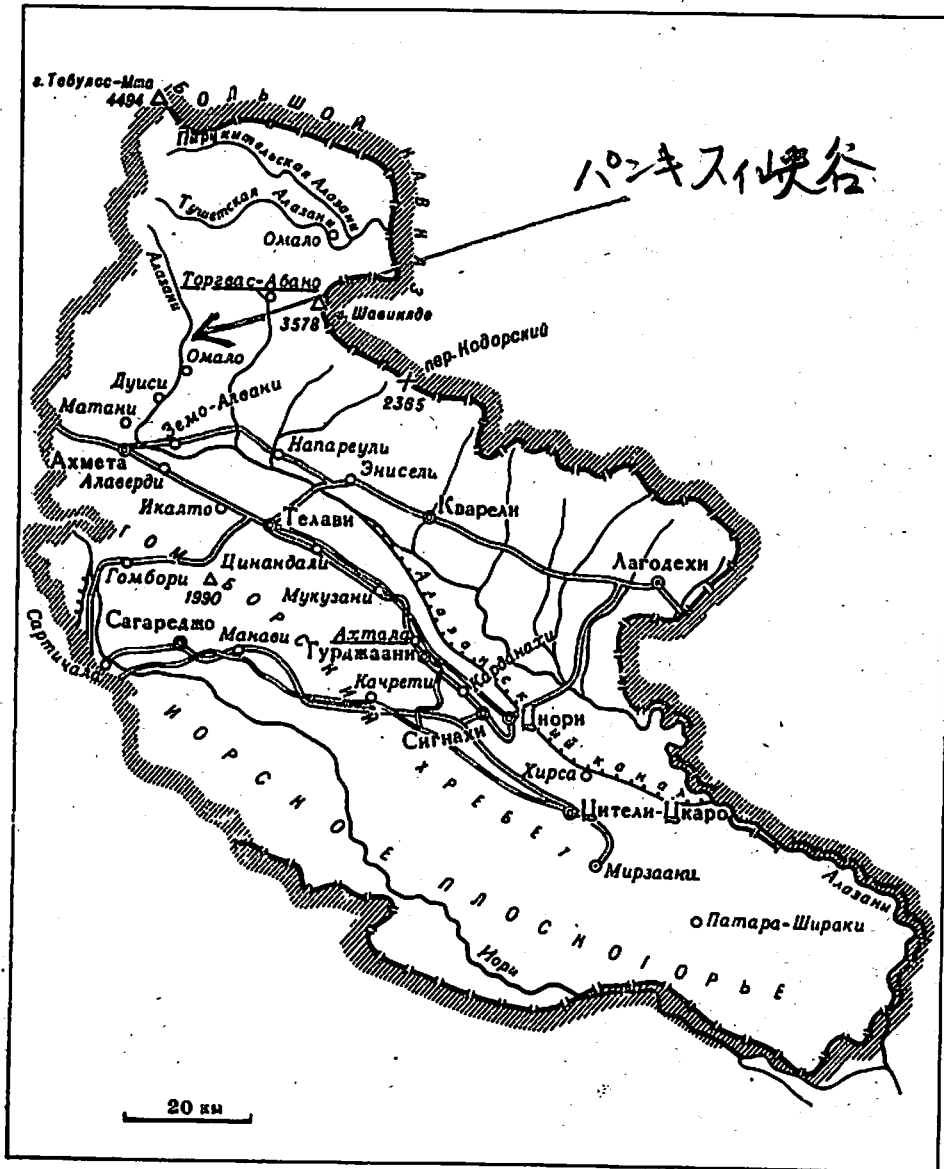
МН : Moscow News

НГ : Независимая Газета

- 北川誠一『ダゲスタンのイスラム』（リーフレット）、東北大学、1999年
 Baghdasarian,L.The Southern Caucasus in the New World Order Context : Who wants Terrorists?,*Central Asia and the Caucasus*,No.5,2002,pp.29-36
 Dzeibasshuvili,K.Rusia and Georgia:A Future Hard to Predict,*Central Asia and the Caucasus*,no.3.2000,pp.50-55
 Грузино-северокавказские в з а н и м о о т н о ш е н и е (Сборники), Тбилиси, 1981
 Kurtkidze,Sh.and V.Chikovani,Georgia's Pankisi Gorge:An Ethnographic Survey,2002,University of California,Berkely,2002,ハイパーテキスト
 Маргошвили,Л.Ю.Культурно-этнические взаимоотношения между Грузией и Чечно-Ингушетие,Тбилиси,1990
 Месхидзе Дж ,Кисты, ,Ислам на территории бышеибу Российской империи, т.2,Moskva,1999. с.48-50
 Шавхелишвили,А.И.Из истории гортsev vostochnoj Gruzii, Tbilisi,1983
 Skakov,A.,On Two Sides of the Border:Georgia and Chechen,*Central Asia and the Caucasus*.,No2.2000,pp.151-164
 Османов,М. и И.Алироев,*История и Культура В а н н а о в х*,Москва,2003,
 Pchavela, Vaja, *Le Mangeur de serpent*, Moscou, 1984
 Top'chishvili, R. *Aghmosavlet sak'artvelos mtielta migratsia XVII-XX ss.* Tbilisi, 1984
 Волкова, Н.Г.Этнонимы и племенные названия Северного Кавказа, М о с к в а, 1973
 Yemelianova,Galina. Islam in RUSSIA:an historical perspective,pp.15-60 in *Islam in Post-Soviet Russia:Public and private faces*,Hilary Pilkington and Galina Yemelianova,London and New York,2003

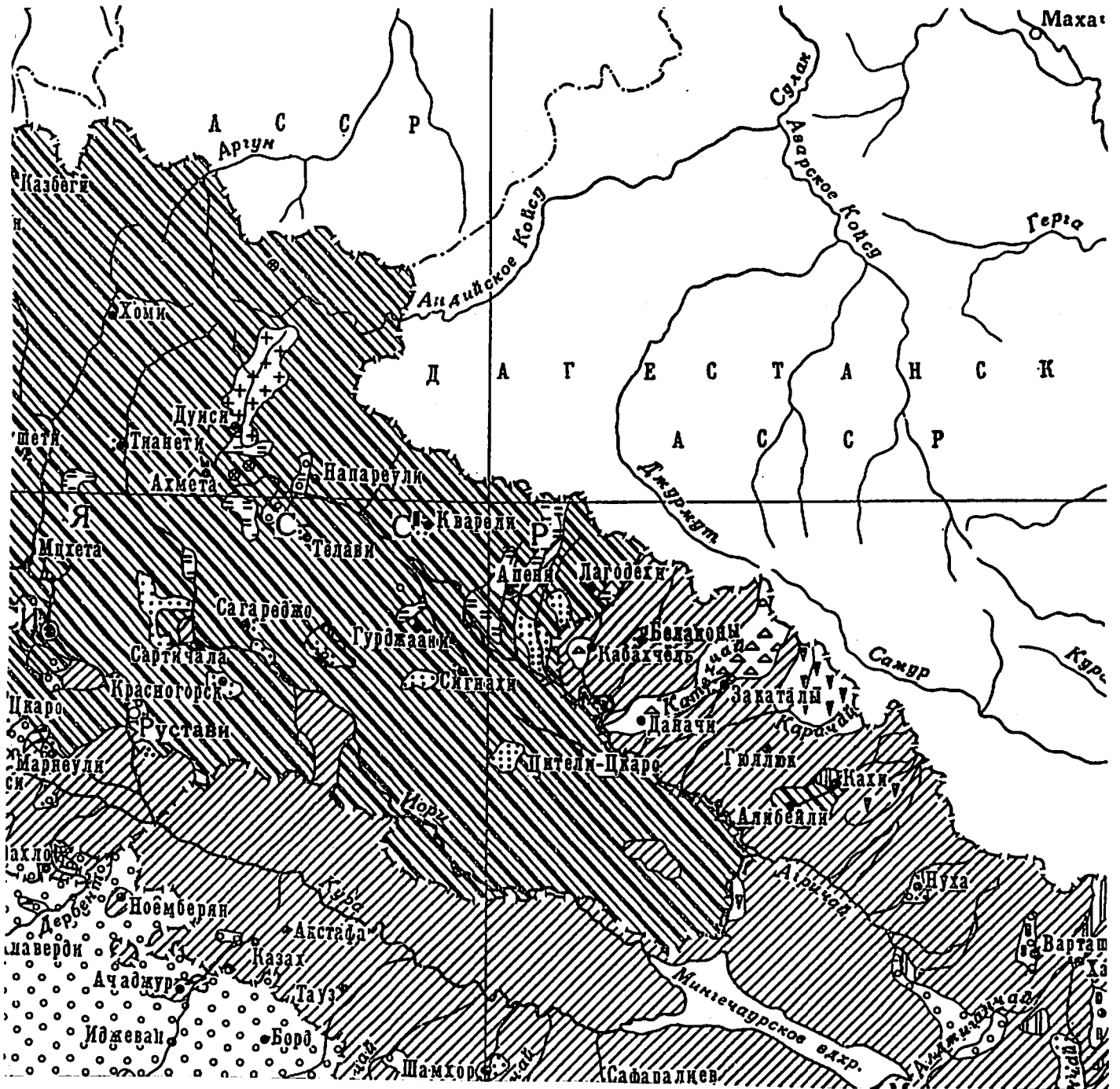
グルジア東部カヘティ地方

Кахети



グルジア東部言語分布地図

キスト語は + であらわされている。



1. 凡例
2. 分布图

(T.) 以前の人集落

K. 日本人集落
 O. 土人集落
 P. 70% 土人
 T. 10% 土人

凡例

